
魔法とかなんとか

四季式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法とかなんとか

【Nコード】

N3900V

【作者名】

四季式

【あらすじ】

『対価を払えば願いを叶えることができる能力』を持つ主人公がリリなのとかゼロ魔とかの世界で好き勝手する話、の予定。

プロローグ的な。

「…………飽きたな」

プロローグ

I Prologue

とあるマンションの一室。

見るからに高級そうなソファの上に、気怠げな少年が気怠げな様子で横たわっている。

広々とした部屋には、しかしその少年以外の人間はおらず、それどころかソファ以外の家具は一切ない。

「…………とかなんとか三人称でモノローグってるけど、この部屋は暇だったからなんとなく作ってみただけなんだよね。お金なんていくらでもあるし。まあ僕のお金じゃないんだけどね。まったく、僕の『能力』は便利極まりないけど、その性質上なにことも上手く行き過ぎるとというのが欠点といえば欠点だね。この世に神なんてもの

が存在するとしたら、何を考えて僕にこんな『能力』を与えたのかぜひ聞いてみたいよ。『対価を払えば願いを叶えることができる能力』なんてどこの侑子さんだよ。キセルなんて使わねえぞ。しかもあれより規制が緩くて、僕自身の願いも叶えられるうえにその場合の対価は僕の気力やら体力やらで払えて尚且つある程度選択できるとか便利すぎだろ」

とかなんとか独り言。

一人暮らしだと独り言の聲が大きくなるんだよね。気にする人がいないから。

閑話休題。

「しかしこの生活………というかこの世界に飽きたな。いろいろな手段で様々なルートで多種多様な人物を使って調べたけど、どうやらこの世界には僕みたいは何かしらの『能力』をもっている人間はいないみたいだ。よくテレビでやってる超能力者はごく一部を除いて偽物だったし、本物も異質な能力というより人間にもともと備わっている能力を引き伸ばしたような、まさしく文字通りの『超』能力だったし。あーあ、僕ひとりぼっち。寂しくて死んじゃう！ まあそれは気が向いた時にしよう。えーとなんの話だったっけ？ そうそう、この世界にもう飽き飽きというはなしだったな。うん、なんかもうどこでもよくね？ ここに来るのなんて郵便屋さん以外は政治家のおっさんくらいだし。というか思いつく知り合いのほとんどがおっさんとか鬱だわー。しかも名前なんて覚えてないし。まあ、この生活もお金持ちの政治家さんたちが対価で払ったお金だから、いないと困るんだけどね。………はあ、また話が逸れたな。つまり、この世界にさよならしてもっと楽しそうなところに行っちゃおう、と

いうことだ。だがしかし、いくら僕の『能力』でも人ひとりの体力やらを対価にして異世界に行くなんてファンタジー溢れることはできない。それでもどうにかできないかと、頭の片隅で片手間に考えて一週間、ついに妙案が浮かんだのだ。そのために僕以外の能力者がいないかを調べたのさ。それだけが足りない前提条件だったからね。この考えが正しければ、『僕としては』小さな対価で世界を渡れる。失敗したとしても代わりに僕の存在が消滅するくらいだから、まあ大した賭けじゃない」

ふう、一息。

「考えてみたらなんてことはない、簡単なことさ。僕以外にこんな能力をもつ者がいなくて、しかも僕自身はほとんど対価なしで自由に物事を操作できる。それはまるで、

僕がこの世界の神【所有者】みたいじゃないか？

そうだとするなら、この世界は僕のもの。僕の『能力』は僕自身の『何か』を対価とする。ならば、この世界を対価に異世界に渡ることができるのでは？ と考えたわけ」

んじゃまあ、そんな感じで行ってみよう。

その日、ひとつの世界が終わりを迎えた。

01話 ルート選択

気が付くと、森の中にいた。

「…………ふうん、どうやら成功したみたいだな」

さてさて、いったいどんな世界なのやら。

科学が発展した世界？ 魔法が発達した世界？ それとも僕の知らないような生物が闊歩する世界？

いろいろ想像しながら森を散策していると何か光る物が見えた。

「ん？ なんだ？」

草木を掻き分け、光る何かに近づく。

「…………へえ、なるほどね」

すぐ足元にあるそれをひょいと拾い上げる。

それは、不気味に青く光る宝石……。

「ジュエルシード、か」

―第1話―

ということで、『魔法少女リリカルなのは』っぽい世界みたいだ。ばい、というのはジュエルシードは確かにあったけど、それイコール原作通りというわけではないから。

もしかしたら何かしら原作との相違点があるかもしれない。

「まあ、あったらあったでその時に、臨機応変に対応していけばいいか」

とりあえず、ジュエルシードがあるということはユーノ・スクライアはこの世界に存在しているとみていいだろう。

「んじゃ、まずは宿でも探しますか」

幸い、この世界ですぐにでもタダで泊めてくれそうな所は何ヶ所がある。

？高町家の誰かに遭遇↓事情を聞かれて居候、もしくは養子

？フェイトの住んでいるマンションに突撃↓誤魔化して共同生活

？図書館ではやてに親切↓八神家に居候

？アリサとすずかの誘拐を発見↓救出してお礼に住まわせてもらう

などが考えられる。

？はテンプレ過ぎてなんかヤダし？は場所が分からん。？も面倒くさそうなので、？の八神家に決定。

決め方がテキストだけど決定したら決定。

「やってみたいこともあるしね」

というわけで図書館に移動する。

■
■
■
■
■

図書館に着くまでに迷子になって地味に能力使ったりしたけど、

なんとか到着。

とりあえず、目的の車椅子少女を探しに図書館内を軽く一周する、が見つからない。

時間は昼過ぎくらいだから居てもおかしくないんだけどなあ。

無印時代のはずだからまだ家でぼっちの八神はやてに優しくして取り込んで利用できるだけ利用しよう青田刈り作戦を思いついたけど、肝心のはやてがいないんじゃないでしょうか。

「……適当になんか読むか」

僕は趣味の本を探しに席を立った。
ラノベ

この図書館はどれだけのジャンルの本を取り扱っているのだろう、と思うほどラノベが置いてあった。

久しぶりに死にバラとか半月とかを読んだら、いつの間にか結構な時間が過ぎてしまっていた。

そろそろ本格的に探さないと、と思って本から顔を上げると対面の席の人と目が合った。

その人物は、茶髪っぽいショートボブ？で車椅子な女の子。

どう見ても八神はやてです本当にありがとうございます。

まあ実際は二次元ではなく三次元の存在なので顔では判断出来ないが、背格好や車椅子に乗っていること、あとは時間帯などからこの子がはやてで間違いないだろう。

僕が図書館に來た目的の彼女は、僕が机に積んでいる読み終わったラノベを手にとった状態で停止している。

どちらも1巻を読み終わり、半月の2巻を読もうとしたらしい。

「あ、あの、すみません。つい手に取って読んでみたら止まらなくなってしまうって」

フリーズが解けたはやては、慌てながらも勝手に読んだことを謝罪してくる。

予想外の接触だが、悪くない状況だ。

こちらから接触するよりも警戒されずに済むし、勝手に本を読んでいたことに罪悪感があるようなので主導権を握りやすいはずだ。

「ああ、いいよ。気にしないで読んでくれて。僕は一度読んだことがある本だから」

「ほんまですか？　ありがとうございます」

怒られると思っていたのか、ほっとした表情になる。

「いつもはハードカバーのばっかりなんやけど、ラノベもまた別の面白さがあるんですね」

「そうだね。世間では挿絵が問題なのかマイナスなイメージがあるけれど、これらも立派な小説だ。まあ、若者向けがほとんどだから大衆に理解されやすいものばかりでないのは事実だけだね」

「確かにそうですね。私も最初見かけた時は表紙で遠慮したんやけど、あらすじとかを読んでみると面白そうなものがよくありますもん」

などラノベ談義で盛り上がりたり読書に集中したりを繰り返していると、いつの間にか閉館時間になっていた。

「ごめんなあ、迷惑かけてしもつて」

図書館で半月の続きを5冊程借りたはやてを、もう時間も遅いということまで家まで送っているところだ。

本の話で盛り上がったおかげか、はやての口調も碎けた感じになった。

「いやいや、これくらいなんてことないさ。それよりいいのかい？
八神ちゃん。見知らぬ人を自宅に招いたりして」

「短い時間やけど一緒に話して、悪い人やないって分かったから大

丈夫！」

悪い人じゃないからと言って、決して悪いことをしないと限らないんだけどね。

まあそんなこんなで八神邸に到着……と同時に誰かに見られてるような気が。

そういえばネコ姉妹が見張ってるんだっとな。

まあ彼女らもいきなり襲いかかって来るようなことはしないだろうから、とりあえず放置。

「お邪魔しまーす」

「どうぞー」

というやりとりの後、リビングでお茶を出されて一息ついてます。

「少し待っててなー。お礼に夕飯ご馳走するで」

台所へと車椅子を走らせるはやてを眺めながら

「お構いなく」

と言いつつも強い拒否はしない。

ぶっちゃけありがたいからな。

これで飯はゲット。

あとはどうにかして泊めてもらえるようにしたい。

頼めばいけそうな気がしないでもないが。

よほど対人関係に飢えていたのか、図書館からここまでずっとニコニコ笑顔だったからな。

ついさっき会ったばかりの年上の男——ああ、言い忘れてたけど僕18歳ね——を泊めるくらいはするかもね、うん。

幸い、話のネタはあることだし。

■ ■ ■ ■ ■

夕飯はカレーでした。美味しくいただきました。

「誰かと一緒に食べたのなんか久しぶりやな。めっちゃウキウキするわ」

「それは重畳。さて、そろそろシリアスパートに移りますか」

「なんや、今までギャグパートやったんか」

ケラケラ笑ながら突っ込まれる。

「いやいや、ここからは真面目な話になるよ。八神ちゃんの脚の麻痺についてだ」

症状とかは帰り道でだいたい聞いている。

「私の、脚？ でもお医者さんも原因が分からへんのにどないするん？ それこそ奇跡か魔法でもない限り、一生このままや」

諦めの混じった視線を自分の脚に向けるはやて。

「まさしくその通り。魔法や奇跡でもない限りその脚は治らない――それ故に僕は君の脚を治すことができる。奇跡も魔法もあるんだよ、八神ちゃん」

「え？」

ぼかんとした顔をするはやてに向かって、僕はニヤリと嗤う。

「さあ願いたまえ。対価を払えばどんな望みも叶えてあげよう。僕の名前は坂井祐……………奇跡遣いさ」

なーんてカッコつけちゃったりして！

02話 契約とか

八神はやて side

最初は何を言うてるのか分からなかった。

今日図書館で会って仲良うなった人、祐一さん曰く、彼はどんな奇跡でも起こせるらしい。

相応の対価を払えば。

「つまり、私の脚も治せるん？」

「もちろんだよ。後遺症もなく綺麗さっぱり治せるさ。ただ、そのために八神ちゃんは何かを失う覚悟はあるかな？」

対価は願いの大きさによって変わる。

より大きな願いならば、対価もそれに矛盾なく比例して大きなものになる。

私の場合、願いは『脚が動くようになること』。

今の医学では原因が解らない脚の麻痺を治すのに、どれ程の対価を払わんとならんのやろう。

……でも……それでも。

「それでも、私は自分の足で歩きたい。自分の足で地面を踏みしめたい。だから――」

願いを、叶えて。

「了解したよ八神ちゃん。君の願い、ばっちりしっかり十全に叶えてあげよう」

祐一さんは微笑みながら頷いてくれた。

s i d e o u t

坂井祐一 s i d e

いやー、子どもは単純で助かるよ。

奇跡とか魔法とか覚悟とかそれっぽいことを話せば面白いようにこっちの思惑通りに動いてくれる。

まあ、いきなり超常現象を信じるのは無理だろうから僕の言葉に

疑問を持たないように軽く能力を使っただが、それでもこの答えははやて本人が自分で導き出したものであるのは間違いない。

ああ、ちなみに今使った能力の対価は自身の魔力を充てている。

どうやら『世界』というのは思いのほか高価値なものだったようで、世界移動で余った分が魔力として僕の中に貯蓄されている。

魔力は、ジュエルシードから感じたエネルギー的なものがそうかな〜と思ったら、自分の中にそれと同じものがとんでもない量で存在したため分かった。

ただ、通常魔導師が魔力を生成するリンカーコアなる器官があるのかは分からないので、使った魔力は元に戻らず使いつばなしになる可能性もあるな。

現在の保有魔力はジュエルシード10個分くらいはあるみたいだからとりあえず大丈夫だろう。

閑話休題。

さてさてはやての願いだが、ちょっと工夫するとってもお得な感じになるのだよ。

願いの叶え方を言わないと、そこらへんは僕の裁量に任せられちゃうんだよね。

だから、はやてと闇の書とのラインを僕と闇の書とのラインに変

えるというやり方でも、結果としてははやての脚は治るということになる。

つまり僕としては闇の書＋はやての対価が手に入るわけ。

ぼろ儲けだね。

「というわけで八神ちゃん、君はなにを差し出すんだい？」

「そんなん言われても、私が持つとるものなんてそう価値があるもんやないで。精々この家くらいやな」

そう言われて室内を見渡す。

ふむ、なかなかしつかりとした家のようにだ。

「んじゃそんな感じでいってみよか」

「え！？ ノリ軽っ！」

だって僕としては簡単なことだもん。

えーと、願いは『八神はやての脚の回復』、対価は『八神家の所有権』っと。

「ん、終わったよー」

「……………何か起こったようには見えへんけど」

ジト目で見てくるはやて。

「因果を捻じ曲げるような願いならまだしも、これ位のものなら光とかも出ないよ」

エネルギーの無駄だからね。

「それよりも脚に変化はないかい？」

「え、あ、そういえば足先の感覚がハッキリしとる……………治つとる！」

そう言いながら自分の脚に触っているはやては驚き、喜び、そして笑ながら泣き出した。

「ひつく、な、治つとるう、ひつく」

えーと、こういう時は抱き締めたりするといいんだっただかな？

試しにそつと抱き締めてみる。

「ふえ？ 祐一さん、な、なにを」

「いやね、こういう時はこうした方がいいのかなぁと思ひまして」

そう言うつと、はやては涙を浮かべながらもにっこり笑って

「それなら、もう少しこうしといてえな」

自分からギュッと抱きついてきた。

あーこれがフラグなのかなーと考えつつ、僕は自分に新たに繋がった魔力のラインを確認していた。

恐らくこの家の本棚から来ているだろうラインからどんどん魔力が吸い取られてるのが分かる。

とは言っても全量からすれば微々たるものなので特に問題はない。

これで僕は4人と1匹の下僕を手に入れたわけだ。

呼び出しは明日ということで、とりあえず

「そういえば八神ちゃん。この家の所有権が僕のものになったけど家事とかめんどくさくてさ、どこかに凄腕の家政婦さんがいないか探してるんだけど知らない？」

「えっ……………それなら任しとき、この家に住まわせてくれる代わりに炊事洗濯なんでもやったるで！」

こんな感じで会話と契約は完了して、その日は一緒にベッドで寝ました。

03話 守護騎士出た

翌朝。

「それじゃ今度は魔法を見せてあげるよ」

「おおー、なにが起こるんやろ」

「ま、それは見てのお楽しみ」

というわけで、さっそく守護騎士の召喚をしようと思います。

はやての部屋にあった闇の書を持って……………。

「そういえば、やり方分からないや」

「えー」

「まあとりあえず魔力流し込んでみればいいかな」

てきとうにジュエルシード1個分くらいの魔力をラインを通して流し込んでみる。

「おお、光った」

「ほんまに魔法の本やったんやね」

あ、召喚は成功しましたよ。

―第3話―

シグナム side

新たな主に召喚された。

将である私に続いて他の守護騎士たちが主に対して跪いている。

目の前には2人の人物。

青年と言える年頃の男と、鉄槌の騎士と同年齢ほどの容姿の少女。

闇の書とのラインからして、恐らく主は青年の方なのであろう。

どのような方なのかはまだ分からないが、我らのすべきことは
主の守護と闇の書の完成。

それ以外の些事は考えても意味がない。

が、できることなら我らが仕えるべき方であってほしいものだ。

side out

坂井祐一 side

薄着の4人の男女が跪いている光景って結構シユールだね。

「えっと、じゃあまずは自己紹介からかな。僕は坂井祐一、君らの主さ」

「私は八神はやて。この家で家政婦さんをとりまします。ちなみに祐一さんとは一晩を過ごした仲や」

………… いや、なにもしてないよ？

普通に寝てただけなのにどうしてそう誤解を招くような言い方をするんだよ。

ほら、ヴィータなんか自分も守備範囲に入っていると思って軽く震えちゃってるじゃないか。

「………… えーと、べつに僕は幼女趣味とかロリコンとかではないし、かといって成人女性なら無理やりにもとかはしないので安心してほしい」

あからさまにほつとする守護騎士たち。

こいつら最初はこんなに感情豊かじゃないんじゃない？

「それじゃあそっちも自己紹介お願いね」

「はい、私はヴォルケンリッターが将、烈火の将シグナムと申します」

「…………鉄槌の騎士、ヴィータ」

「風の癒し手、湖の騎士シャマルと申します」

「盾の守護獣ザフィーラ」

それぞれ性格の出る自己紹介でした。

■ ■ ■ ■ ■

「君たちにやってもらったことがいくつかある。1つ目は魔力の蒐集。これは人間以外の生物からとって来てもらいたい。理由は、今は管理局に目を付けられたくないからだ」

「承知しました」

代表してシグナムが返事をする。

「で、2つ目がこれ」

ポケットからジュエルシードを取り出す。

「これと同じものがここら一帯にばら撒かれている。それを回収してほしい」

「分かりました。シャル」

シグナムにジュエルシードを渡すとシャルが調べ出す。

「これは……主ほどの量ではありませんがとんでもない純魔力の塊ですね。これひとつで軽く次元断層が引き起こせますよ」

シャルの報告を聞いて、専門用語ばかりでちんぷんかんぷんのはやて以外は顔を引き攣らせていた。

「それを含めて21個あるからよろしくね」

「し、承知しました」

「ああ、あと回収のときに2人ほど邪魔する魔導師が来るかもしれないけど……極力戦闘は避けてね」

「分かりました、どのような者が相手でも必ずや勝利を……は？」

「いや、だから極力戦わずに逃げちゃって」

「しかし主、我らヴォルケンリッター、魔導師2人程度ならば齒牙にも掛けない自信がありますが」

戦えないのが気に入らないのか、威圧感を出しながら答えるシグナム。

「僕にも僕なりの考えがあるのさ。文句があるのは分かるけど、とりあえず従ってくれないかな」

この程度の威圧でビビる坂井祐一ではないのだよ。

……… ちょっと足が震えてるけど。

「…………… はい、余計なことを言ってしまい申し訳ありませんでした。主の言う通りに行います」

「うん、じゃそれをお願い。まあ時間はあるしゆっくりやっていい」

そこからははやてへの説明タイムで1日が終わりました。

04話 進化してジュエルリーフ

守護騎士たちの甲冑作るの忘れてました。

考えるのめんどいので原作通りのものにしました。

「だいたいのことは理解したんやけど、このジュエルシード集めてどないするの？」

「ふふふ、それは秘密さ八神ちゃん。なぜならその方がカッコいいからさ」

「キャプテンブ ボー！？」

ー第4話ー

魔力蒐集はシグナムとザフィーラ、ジュエルシード回収はヴィータとシャマルという担当になった。

さっそく闇の書を持って蒐集に行った2人に対して、こっちは4人でゆっくりお茶してます。

まあ本当はシャマルのクラールヴィントで海鳴市中を探索してるのだが。

「あ、ありました。北西2キロの公園です」

「それじゃ行ってくるぜ！」

勢い良く立ち上がったヴィータは、その勢いのまま家から飛び出して行った。

「ご飯までには帰ってくるんやで〜」

はやての場違いな言葉に苦笑する。

「さて、さっきのは冗談としてジュエルシード回収の目的ね。……ゲームでさポケモンってあるじゃん。僕はその中で進化するのが特に好きでさ、ジュエルシードなんていかにも進化しそうな名前だから、いつそ僕の手で進化させちゃおうと思ってさ」

「あの、えっと、そんなこと可能なのでしょうか」

おずおずとシャマルが質問してくる。

さすがにまだ緊張しているようだ。

「それなら心配ないよ、事実上僕にできないことはないからね」

「そうなんよシャマル。祐一さんはな、奇跡遣いゆうて対価さえ払えばなんでも願いを叶えてくれるんやで。私の脚の麻痺も治してく

れたんや」

はやてはまだ筋力がないから車椅子を使用しているが、麻痺は回復しているため、膝を伸ばして足の指をにぎにぎして見せた。

「ふえー、すごいんですね主は。いったいどんな仕組みなんでしょうか」

「さあねえ、物心ついたころからあったからね、原因とかは分からない。すごいレアスキルだと思ってくれればいいよ」

そんな感じでお話ししたら、ただいまー、とヴィータが帰って来た。

ヴィータは他の守護騎士たちより僕らに、特にはやてに懐いていてよく車椅子を押している。

「見て見てはやて、祐一。じゃーん、3個もゲットしたんだぜ」

ヴィータの手には封印済みのジュエルシードが3個乗っていた。

ふむ、最初の1個も含めると4個か。

「じゃあシグナムたちが帰ってきたらやってみようか」



というわけで、夕飯後に片付けたテーブルにジュエルシードを並べる。

「さて、これからジュエルシードを進化させるよ。今のジュエルシードはただのエネルギーの凝縮体。だからそこに指向性を付けてやるうということさ。ただ願いを叶えるのではなく、人間の闘争本能を形にするようなものにしようと思う」

「つまり核鉄やな」

はやてよ、お前も知っているか。

というわけでやってみようか。

願いは『ジュエルシードに指向性の付与』、対価は『ジュエルシードの含有魔力の半分』でいいかな。

一瞬ピカツと光ったと思ったら、テーブルには4つの青い核鉄があった。

「おおお、ほんまに核鉄や。青いけど」

「うん、ジュエルシードの進化系だから『ジュエルリーフ』と名付けてみた」

「あの、主、核鉄とは一体なんなのですか？」

シグナムが困り顔で聞いてくる。

他の騎士たちも似たような表情だ。

「いいか、核鉄というのはだな――」

そこから2時間ほど、僕とはやてで武装錬金がいかに素晴らしいかを4人に教えた。

■ ■ ■ ■ ■

「つまり核鉄を持ちながら『武装錬金!』と叫べばそいつに合った武装に変化するってことだな!？」

そのとおりですヴィータちゃん。

話が進むごとに目がキラキラしていたヴィータ以外は少し憔悴ぎみのようである。

「で、ちょうど4個あるから君らに1個ずつ貸与するよ、使ってみてね」

「おう! じゃあさっそくいくぜ、武装錬金!」

ヴィータはテーブルからジュエルリーフをひとつ掴むと、思いっきり叫んだ。

さてさてどんな形になるやら。

次回へ続く！

05話 武装錬金!とか(前書き)

核金↓核鉄に修正しました。

05話 武装錬金!とか

「武装錬金!」

ヴィータの、心の底からの叫びが大気を震わせる。

100分の1秒で展開される青い核鉄『ジュエルリーフ』は変形しながらヴィータの前へ収束していく。

青い魔力光を放ちながら形作られたそれは――

大きなぬいぐるみでした。

―第5話―

「の、のろいっさぎゃ」

ヴィータの目の前には彼女と同じくらいの大きさの『のろいっさぎ』があった。

「なあなあ、のろいうさぎってなんだ？」

まだのろいうさぎを知らないヴィータは、ぬいぐるみに興味津津な様子で聞いてきた。

「のろいうさぎというのはね、最近ゲーセンのUFOキャッチャーで人気のぬいぐるみさ。ヴィータの帽子にも付いてるはずだけど？」
のろいうさぎについてはよく知らないので適当に答えておく。

さて、これはおそらく自動人形オートマトンの武装錬金といったところかな。

自律行動して主人の補佐をするようなタイプだろう。

「ヴィータちゃん、ちょっとのろいうさぎに命令してみて」

「うん、じゃあ『バク転しろ』」

すると、直立不動だったのろいうさぎが鮮やかなバク転を披露して見せた。

「おお！　すげえ！」

「多分だけど、ヴィータが命令すればある程度自分で判断して行動すると思うよ」

1人で特攻してしまうヴィータにはピッタリな武装錬金だね。

みたいなことを他のヴォルケンスは思っているようで、得心した顔になっている。

「それじゃ、残りの3人もやってみようか。あ、強くイメージすればそれに近いモノが出るかもしれないからそうしてみるのもいいかもね」

「はい、では」

「『武装錬金！』『』」

ピカッと光ってまずはシグナム。

自身の武器であるレヴァンティンの強化を想像したのか、少々形状が変化している。

カートリッジの部分が2つになっており、刀身が一回り小さくなっている。

カートリッジの強化は分かるがあの刀身は……おそらく『アレ』だろう。

次はシャマル。

シャマルは強化ではなく新武装を想像したようで、身長くらいの杖を持っている。

さすがに杖というだけでは能力の判断がつかないな。

最後に今のところ単独のセリフがないザフィーラ。

籠手の武装錬金でたぶん大きくなったりするんじゃないかな、終わり！

■ ■ ■ ■ ■

「んじゃ、ちよつと散歩に行ってくるよ」

「主、ならば誰かをお供に」

シグナムが提言してくるけど、ちよつと今回はひとりで行かないとダメなんだよね。

「大丈夫だよ。それより僕が帰ってくるまでに八神ちゃんの手伝いをして夕飯作つといてよ」

「……………了解しました、お気を付けて」

まだ何か言いたげだったが、主の命令ということで引き下がった。

八神邸から1歩出ると怪しげな2人の男に囲まれた。

「貴様、一体何者だ？」

「何者と言われてもね。坂井祐一、奇跡遣いさ」

2度ネタです。

「奇跡遣い？ ふざけているのか！」

あらあら怒られちゃったよ。

「あとはそうだねー闇の書の主とかやってるよ」

「「っ!？」」

おー、驚いてる驚いてる。

「そんなはずはない、闇の書の主は八神はやてのはずだ。そもそもなぜ貴様が闇の書のことを知っている」

「他にも知ってるよ、リーゼロッテちゃんにリーゼアリアちゃん」

「「なっ!？」」

さすがに自分たちの正体は知られてないと思っていたようで地が出ちゃってるよ。

「飼い主さんに言ってくれるかな。もう闇の書を封印する必要はないってさ」

「…………何を根拠にそんなことを」

「だからさっき言ったじゃないか。僕は坂井祐一、奇跡遣いさ。どんな願いでも叶えることができる。ただし相応の対価を払えば、の話だけどね」

「…………分かった、伝えておこう。ただ、我々は常に監視している。妙な気を起こすなよ」

「分かってる、こちらとしても管理局のお世話にはなりたくないからね」

次の瞬間、2人はいなくなっていた。

……………僕も魔法習おうかなー。

06話 報告タイム

リーゼアリア side

今回の接触の結果は、不明の一言に尽きる。

なんなのだあの男は。

いきなり監視対象の八神はやてに着いて来たかと思ったら、彼女の脚の麻痺を治すとか言って本当に治してしまうし、翌日には守護騎士たちを召喚して、しかも今の話が本当なら闇の書の主が変わっている。

さらには不安要素である先日街中にはら撒かれたロストログアの回収まで始めるし、もう何がなんだか。

とりあえずお父様への連絡はしなければならぬ。

だが、私たちがすべきことは変わらない。

対象が八神はやてから謎の男に変わったただけだ。

あの男はもう封印は必要ないと言っていたが、はいそうですかと信じるわけにはいかない。

「……………奇跡、か」

できるものならして欲しいよ。

誰も犠牲にせずに闇の書を葬るなんて不可能なことを。

side out

坂井祐一 side

「ただいまー」

あのあと普通に散歩して帰ってきました。

「おかえりー、今夜はカレーやで」

「んじゃ辛さは極辛で」

「んなもん食えんわ！」

― 第6話 ―

お子様もいるので甘口カレーになりました。

だがただの甘口と侮るなかれ。

辛すぎず、決して甘口の範疇を出ないが、その中で極限まで主張されているスパイスのハーモニーが………要するにギガうまと言うことです。

「ごちそうさまでした」

さて、報告タイムだ。

「んじゃまずはシグナムから。蒐集は順調？」

「はい、滞りなく進んでおります。しかし、やはり人間以外の生物のみでは効率が少し悪いですね」

「そっかー。うんいいよそのままです。400ページに近づいたら報告してね」

「了解しました」

次はジュエルシード組の報告。

「それじゃシャマル、報告お願い」

「はい。現在回収したのが、さきほど主がジュエルリーフに変化させた4個のみです。また、ヴィータちゃんの報告では回収したすぐ後に金髪で黒のバリアジャケットの少女が来たと言っていました」

「言われた通り戦わずに帰って来ただけだな」

戦えなかったのが不満なのか少しづーたれるヴィータ。

「次にもしその子と会ったら念話で教えてね。僕が行くまでなら足止め程度の戦闘は許可するよ」

「うっし！ 次の探索は任せとけ！」

「こつこつ単純なところが心配になるな。頼んだよ、のろいうさぎ君。」

■ ■ ■ ■ ■

「そう言えばシャマルの武装錬金ってどんな特性なのか分かった？」

報告の後は自由行動ということで、はやてとヴィータはスマブラに興じ、シグナムとザフィーラは無人世界で武装錬金の訓練兼魔力蒐集に行っている。

「あ、はい分かりましたよ。ただあまり使い勝手のいいものではなくて、どちらかといえば緊急時に使う様な特性ですね」

「へえ、一体どんなのなんだい？」

「動きをトレースする、といえば良いのでしょうか。私が見たことのある動き、例えばシグナムの剣技を模倣して使用することが出来ます」

「そりゃすごいじゃないか、どこが使い勝手が悪いのさ」

「それが……基本的に不可能な体の動きをするので自分にもダメージがくるんですよ。実際、主が散歩に行っている時に試して見ましたが、まだ肩が痛いです」

それはまた使い所に悩む武装錬金だね。

まあ、シャルも限定的にとはいえ戦闘が可能になったな。

これで原作の様にシャルに敵が迫っても多少は対処できる。

とはいえシャルの本業は魔法によるサポートだから、そっち方面の強化はなしか。

「そうだシャル」

「なんでしょうか主」

「魔法教えて」

デバイスがないからほとんど何も教えられないってさ……。

次のジュエルシートは僕のデバイスにすることにした。

07話 運命ちゃんなど

はやてが緊急入院しました。

―第7話―

まあ、当然といえば当然のことだ。

今まで謎の脚の麻痺だったのがいきなり謎の快復を見せたのだ。

定期検診に来た石田先生………だったかな？ に見つかって即病院行きになりました。

「あかんっ、私がいな皆の食事がっ」

とか言っただけで問答無用でした。

ちなみにはやてがいない間は僕だけ普通の食事で、ヴォルケンスは嗜好品……例えばヴィータのアイスクリーンのみ許可しました。

だって5人分も作るなんてめんどくさいじゃん。

守護騎士たちに作らせたらどんな創作料理が出るか分かったもんじゃないからってのもあるけど。

「というわけで、はりきって蒐集にいきますか」

今回は、場合によっては僕も直接出向く必要があるからね。

一応の為にシャルマルからジュエルリーフを返してもらっておく。

使う機会がないのが一番なんだけど。

（祐一、例の黒い奴が来たぜ。今から戦闘に入る！）

おっと念話だ。

（了解、今からそっちに行くから合図したら僕のところに来てね）

「んじゃシャルマル、飛行魔法よろしく」

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

フエイト・テストロッサ side

97 管理外世界、現地名『地球』でのジュエルシード蒐集。

それが母さんに頼まれたこと。

始めは順調に進むかと思っていたが、予想外にも他の蒐集者が現れた。

その数は2人。

1人はいかにも初心者で脅威には思えなかった白い魔導師。

そしてもう1人は――

「うらああああっ！」

「くっ！」

――私の目の前で鎚型デバイスを振り回す赤い魔導師だ。

こっちは玄人どころではない。

自分より格上だとはつきり分かる。今も避けるだけで精いっぱいだ。

でも、それでも負けられない。

母さんの為に。

母さんの願いが何なのかは分からないけど、それにジュエルシードが必要なんだったらー

「負けないっ！」

「はっ、上等！」

side out

坂井祐 side

「おおー、白熱してるねえ」

「ですが圧倒的にヴィータちゃんの方が有利です。武装錬金を使うまでもないですね」

冷静な分析のシャマル。

確かに無印初期のフェイトのレベルではどう頑張ってもヴィータには勝てないかな。

さて、そろそろ介入しますか。

（ヴィータ、近くまで来たからこっち来てー）

（分かった！）

ヴィータがいきなり後退したので不審がつているが、フェイトも続いてついて来た。

「っ！ さらに2人も」

敵が増えたことで苦い顔をしながらも、しっかりとバルディッシュを構えるフェイト。

「いやいや待ってくれよお嬢ちゃん。僕らは別に戦いに来たわけじゃないのさ。まあ、ヴィータには足止めしてもらっていたけど」

両手を上げて敵意がないことをアピールする。

「なら、なにが目的なんですか。ジュエルシードが欲しいなら戦うしかありません」

「そうでもないさ。僕らと君らの目的は、似ているようで根本のところでは違っている」

「え？」

「君らはジュエルシードを使っていたいことがあるだけで、ジュエルシード自体は別の物でも構わない。対して僕はジュエルシード自体を目的としている。ほら違うじゃないか」

「……………あなたが何故こちらの目的を知っているんですか」

「目的以外も知ってるよ、フェイト・テストロッサちゃん」

「っ！ どうして私の名前を」

だから目的以外も知ってるって言ったじゃないか。

「プレシア・テストロッサに伝言があるから、伝えてね。『彼女の蘇生という願いを叶えたかったら僕のところに来てね』」

「蘇生？ いったい何のことを」

「ああ、これは伝言のお駄賃だよ」

そう言いながらヴィータが回収したジュエルシードを投げ渡す。

「え？ あっ」

「それじゃ伝言よろしくね」

そう言い残して、シャルルの転移魔法で八神邸改め坂井邸に飛んだ。

……ジュエルシートでデバイス作れなかったな。

08話 ネタバレ、かな？（前書き）

あんまうまくないです

08話 ネットバレ、かな？

フエイト・テストロッサ side

伝言を残してジュエルシードをくれた人は、仲間の転移魔法でどこかへ行ってしまった。

「なあフエイト、今日の探索で何かあったのかい？」

「ううん、何もないよ」

あの後合流したアルフにも分かるくらい、私は動揺していた。

結局誰だったのかは分からなかったが、私や母さんのこと、更には（恐らく）母さんのしたいことを知っていた。

彼女の蘇生とはどういう意味なのだろう。

お腹の中に重い物を抱く感覚に苛まれながら、私は時の庭園へと転移した。

side out

プレシア・テストロッサ side

フェイトがジュエルシードの探索から帰ってきた。

いつもは数が少ないと言ってムチで叩くのだが、今回は別の理由でムチを振るっていた。

理由は、謎の男からの伝言である。

ふざけているのかと思ったら、その内容は私の悲願を正確に表していた。

なぜこちらの情報を知っているのかという疑問より先に怒りが込み上げてきた。

ふざけるな！

私がどんな思いでアリシアの蘇生を研究しているか分かっているのか！

それをさも簡単なことのように！

腸

はらわた

が煮え返るような怒りをフェイトにぶつける。

それが代償行為だと分かっているても。

「か、母さ、ん」

フェイトが渡されたジュエルシードには、ご丁寧に謎の男――坂井祐一の自己紹介と家までの地図がプログラムされていた。

こんな芸当はそんじょそこらの魔導師では不可能だ。

いいでしょう、その話乗ってあげるわ。

けれど、失敗した時は貴方の命が消えると思いなさい、自称奇跡遣い。

s i d e o u t

―第8話―

坂井祐一 s i d e

フェイトとの邂逅から3日が経ち、はやてが退院してきました。

検査の結果は筋力以外問題なし。

まあ問題があつたら困るんだけどね。

「結局お見舞いに来んかったな」

「結果の分かる検査入院にわざわざお見舞いなんて行かないよ」

「それもそうやね。ところでこの3日間、何があつた？」

はやてがキラキラとした目で魔法関係の話をせがんでくるので、ありのまま話してみた。

「ちょい待ち、なんで祐一さんはそのフェイトちゃんの家事情を知つとるん？」

んー、誤魔化すのも面倒だからぶっちゃけちゃうか。

皆さんお待ちかねの信頼ブレイクだぜ。

「僕はね八神ちゃん、実は異世界人なんだよ。その世界をぶっ壊してこの世界に来たんだ。もとの世界のアニメに『魔法少女リリカルなのは』というのがあつて、ここはそのアニメに酷似した世界なんだよね。だからテストロツサちゃんや八神ちゃんの事情もちらん知っていて、それを利用したんだよ。軽蔑した？」

これではやてとの関係は終了かな。まあ、居ても居なくてもいいからぶっちゃけたんだけどね。

「……………」

はやてはしばらく真剣な表情で僕を見つめると、

「たとえ利用されたんやとしても、祐一さんは私の願いを叶えてくれた。私に希望をくれたんや」

だから、と言いながら車椅子から立って僕の方へゆっくりと歩いて来た。

「対価を払ったからこの言葉はお門違いかもしれへんけど、それでも、ありがとう」

まるでゴールにたどり着いたかのように、はやては僕に抱きついてきた。

■ ■ ■ ■ ■

あれ？　なんかぶっちゃけたことで更に信頼度上がってない？

あれか、あのフラグっぽいのか。

まあ、話し相手と料理人が改めて手に入ったと思えばいいか。

ピンポーン

「おっと、お客さんかな」

やっぱりとはやてを離しながら玄関へ向かう。

「はいはい、今出ますよー」

ガチャッと扉を開けると、

「やあ、いらっしやいテストロッサさん」

そこには怖い顔をしたプレシア・テストロッサがいた。

09話 テスタロッサさん家の家庭事情（前書き）

今回も微妙です。

でも感想くれるとうれしいです。

09話 テスタロッサさん家の家庭事情

はやては自室にいるように念話で伝え、客人は守護騎士勢ぞろいの居間に案内した。

守護騎士たちは皆プレシアに対してかなり警戒している。

「おいおい皆、そんなに殺気立つなよ。お客さんに失礼だろ」

「は、失礼しました主」

とは言いつつも最低限の警戒は怠らないようで、シグナムの視線は常にプレシアに向いている。

まあ無理もないか。

突然魔力ランクSだかSSの魔導師が訪ねてくれば警戒くらいするさ。

むしろ、これでよく戦闘が起こらないものだよ。

「そいつらは何？」

こんどは警戒したプレシアが尋ねてきた。

「ああ、彼らは僕の守護騎士だよ」

「4人のベルカ式の守護騎士って、まさか貴方、闇の書の主なの？」

さすが天才、ほんのわずかな証拠から真実を導き出すなんてね。

「なるほど、闇の書ならば死者蘇生の方法も載っているかもしれないわね」

「いやいや闇の書の主までは大正解だけど、それは違うよテストロツサさん。僕の自己紹介ちゃんと聞いてた？　僕は坂井祐一、奇跡遣いさ。どんな奇跡だって叶えることができる。それと同等の対価があれば」

「ならあの子を、アリシアを生き返らせて！　何でも差し出すわ。あの子との幸せな生活がまた送れるのなら何でも！」

とはいっても、死者蘇生はかなり大仕事なんだよね。

まあできないわけではないんだけど。

「死者蘇生は本来願う者の全存在が対価なんだが、肉体は残ってる？」

知ってることだけど一応確認。

「ええ、生体ポットの中で腐敗しないように保存しているわ」

「なら少しは対価を減らせそうだね。えっとそうだな、僕らの持っていないジュエルシード17個とテストロツサさんの魔力全て、そして人造魔導師フェイト・テストロツサの所有権、そんなものかな」

「いいわ、ジュエルシードもフェイトも私の魔力も、アリシアが生き返るならすべて捧げるわ、だから——」

「うん、契約成立だ。ジュエルシードが全部集まったらまたここに来てね」

ということで、解散。

■
■
■
■
■

僕の言葉を信じるように『能力』を使ってたんだけど効果抜群だな。

はやての時も使ったけど、心理誘導系は低燃費のようだ。

さてさて、これでうまく行けば残りのジュエルシードとフェイト・テストロッサという有能な魔導師が手に入るわけだ。

まあフェイトは魔導師としてよりもオモチャとして欲しいという理由の方が強いんだよね。

ああ、オモチャと言っても性的な意味じゃなくて弄ると面白そうだなという意味なので大きなお友達は間違えないように。

「主祐一、あの者は一体誰だったのですか？」

「死者蘇生とか、なんなんだよ一体」

という感じにシグナムやヴィータに問い詰められたので、はやてと同じことを話しました。

信頼ブレイクその2だぜ。

もし本当にブレイクしたら『能力』で傀儡にするけどね。

「主祐一、あなたはやはり我らが仕えるに値する方でした。改めて忠誠を誓います」

「ぐすつ、そつか、はやてもフェイトって奴も大変だったんだな」

「プレシア女史は、正直いい感情は持てませんでした。それでもお救いになるとはさすが私たちの主です」

えー、なんでこっちも評価あがってんのさ。

10話 魔砲少女へ

「武装錬金！」

どうも、坂井祐一です。

只今、ジュエルシードを取り込んだ謎生物の相手をしています。

ああ、ちなみに僕の武装錬金は不定形アンノウンの武装錬金、名前はとりあえず見た目からスライム君です。

「行け、スライム君」

にゆるにゆると近づいて相手を拘束する。

「今だよ、高町ちゃん」

「うん！ デイバイイイイン、バスタアアアアー！」

取り込んだのはヤモリでした。

「手伝ってくれてありがとうございますなの」

「本当にありがとうございます」

「いやいや気にすることないさ」

僕も実験が目的だったわけで、ちょうど相手を探してたんだよね。

というわけで、高町なのはとユーノ・スクライアと会いました。

そろそろこっちサイドにも接触しようと思ってたから丁度良かったけど。

「自己紹介がまだだったね、僕は坂井祐一、奇跡遣いさ」

「高町なのはといいます」

奇跡遣いはスルーですか。

「ユーノ・スクライアです。あの、奇跡遣いってなんですか？今まで聞いたことないんですけど」

だって僕が自称してるだけだもん。他にいるわけないじゃん。

「んー、それは秘密。なぜならその方がカッコいいからさ！」

「キャプテン。ラボーなの！」

君も分かるのか高町ちゃん。

「じゃ、じゃあさっきの武装錬金って言ったのも」

「ああ、これが核鉄だよ」

と言ってポケットからジュエルリーフを取り出す。

「きゃー！ 本物なの！ 青いけど！」

「な、なのは落ち着いて。核鉄とか武装錬金って一体なんの事なのさ」

「ん、知らないのか。いいか、武装錬金というのはだなー」

そこから2時間ほど、僕となのはによる武装錬金談義が行われた。

■ ■ ■ ■ ■

「でも、どうして本物の核鉄があるんですか？」

談義を終えたのははようやくまともな質問をしてきた。

ちなみにユーノはグロツキーな感じで地面に横たわっている。

「ああ、それはジュエルシードを変化させたからだよ」

「へえ………ええ!？」

「そんな、危険です!」

お、ユーノが復活した。

「大丈夫だよ。ジュエルシードの保有魔力の半分を使って魔力に指向性を持たせたから暴走なんかは起こらないよ」

「それでも、もとはジュエルシードだったんですから封印して回収しないと」

「つまりあれかい？ 僕と戦って奪い取ると」

「そ、そういうわけでは」

「あはは、冗談だよ。そうだ高町ちゃん、高町ちゃんが持つてるジュエルシード、ひとつだけ核鉄にしてあげようか」

「ほ、ホントですか!？ ぜひお願いします!」

「な、なのは………」

なのはは目をキラキラ光らせながらレイジングハートからジュエルシードを出してきた。

「それじゃいくよー」

ピカッと光ってはい終了。

「意外と簡単にできちゃったの……………」

「そ、そうだね」

2人ともつと派手なのを期待してたみたい。

地味で悪かったな。

「ということで高町ちゃん。その核鉄は君が使うといいよ」

「え、いいんですか？」

「うん。ただしピンチの時以外は使っちゃダメだよ」

「はいっ！　じゃあさっそく練習なの！」

その日の夕方までなのは魔法と武装錬金の練習をしていた。

僕？ 僕はただ見てただけ。

だって練習なんて面倒じゃん。

「暗くなってきたし、終わりにしようか」

「はい、師匠！」

適当にアドバイスしてたら呼び方が師匠にランクアップしていた。

11話 すき焼き戦争（前書き）

ダメだしでもいいので感想くれると嬉しいです。

11話 すき焼き戦争

「ただいまー」

「おかえりー、今夜はすき焼きやで」

「シメはうどんを希望」

―第11話―

「そんなわけで、ジュエルシード蒐集は中止して書のページを埋めるのに集中しようと思います」

「分かりました、主祐ー」

うん、返事はいいんだけど僕の狙った肉をとっていくのはやめてくれないかなシグナム。

「祐一さん、食卓は戦場なんやで。自分の箸以外は信じたらあかん」

「くっ」

シグナムだけではない。他の守護騎士たちも皆、鍋の中の肉を奪い合っている。

主として命令すれば肉は食べられるだろう。が、それをすれば奴らに敗北したことになる。

「負けて、たまるか！」

これが第一次すき焼き戦争の幕開けである。

なわけないに決まってるじゃないか。

普通に皆仲良く食べたよ。

「さて、こっちの世界の食事は口に合ったかい？ テスタロッサちゃんに使い魔ちゃん」

「は、はい。とても美味しかったです」

「うん、すっげー美味かったよ。あんたいい人だな！」

というわけで、フェイトとアルフが居候することになりました。

この間のプレシアとの契約でフェイトをもらえることになったから、先払いとして連れて行って欲しいと言われた。

もちろん本人には契約のことは伏せてある。

フェイトはもっと絶望したところで僕に依存するように刷り込まなくちゃね。

プレシアには原作通りあのメッセージを最後に言ってもらう予定だ。

「そうだテストロッサちゃん、君にいい物を貸してあげよう」

「？ 何ですか？」

ポケットからジュエルリーフを取り出した。

「これは何ですか？」

「これは核鉄と言ってね、『武装錬金！』って叫ぶとその人固有の武装を形成するロストロギアさ」

「すごい。でもそんな大事な物お借りしていいんですか？」

「もちろんいいよ。ただし、ピンチになった時以外は使っちゃダメだからね」

フェイトは核鉄を握り、じっと見てから

「分かりました、お借りします」

と返した。

「ねえねえ祐一、あたしはないのかい？ その核鉄ってやつ」

「アルフ、ダメだよ無理言っちゃ」

フェイトがアルフをたしなめる。

「ごめんね、今君らに貸せられるのはそのひとつだけなんだ」

「そうかい、それがあればあのババアからフェイトを守れると思っ
たんだがねえ」

「アルフ」

核鉄があつたとしてもアルフじゃプレシアには勝てないと思うけどね。

「僕らは契約の関係上、テストロッサちゃんのジュエルシード集めには直接的には手伝えないからね。そのお詫びみたいなものだよ」

「なんで手伝えないんだい？ あんたらがいた方がフェイトも楽なのに」

「テストロッサさんの願いの対価に残りのジュエルシードが含まれているからね、それを僕が集めちゃダメさ」

「『願い』に『対価』ねえ。あのババアにどんな願い事があるのやら」

「……………」

不思議がるアルフと押し黙るフェイト。

君らが考えても答えは絶対出ないのに。

「さて、そろそろ良い子は寝る時間だよ、歯磨いておいで」

今日はとうとうか今日もはやてを抱きまくらにして寝ました。

12話 実は……（前書き）

だんだん短くなってる気がする……。

12話 実は……

「行つてらっしゃい」

「い、行つてきます」

「行つてくるよ」

「暗くなる前に帰ってくるんやでー」

フェイトとアルフがジュエルシード集めに行くというのでお見送りです。

そろそろ2人がガチでぶつかるあたりかなーと思いながら家に帰ろうとすると

「待て」

「うん？」

後ろから呼び止められた。

「2人から話を聞いてね、交渉に来たのだが」

―第12話―

というわけで、今日のお客さんはギル・グレアムさんです。

今回ははやくも関係者なので居間には坂井家全員集合となっている。

「それじゃ貴方が私に援助してくれとるグレアムおじさんなんですか」

「ああ、今まで一度も顔を出せずに申し訳なかった」

まあ自分で氷結封印して殺そうとしていた相手に情が移るわけにはいかないからねえ。

「そこにいる猫姉妹から聞いてると思うけど、まずは自己紹介からかな。僕は坂井祐一、奇跡遣いさ」

このセリフ何回言ったかな。

「どんな願いも相応の対価があれば叶えられる、だったね。それは闇の書の消滅さえ可能なのかい？」

顔を強張らせながら聞いてくるグレアム。

「まあ可能といえば可能だし、不可能といえば不可能なんだよね」

「…………それはどついう意味だね？」

おお怖い怖い、さすがは管理局のお偉いさんだね。

「とうつかさ……………」

もう闇の書無いんだけどね

「はっ？」

グレアムサイドの3人はぽかんと口を開けている。

はやてはよく分かってないようで首を傾げている。

「なあなあ祐一さん。それどういうことなん？ 闇の書言っんはそれなんやろ」

と言いながらはやては僕が脇に抱えている書を指さす。

「この間リインフォースが出て来ただろ？ その時ついでにバグの部分だけ消したんだ。だからこれは闇の書じゃなくて夜天の書なんだ」

え？ そんな描写は出ていないって？

プレシアが来た時に一番殺気立っていたのはリインだし、そのあと2人の境遇を聞いて号泣してたのもリインだし、すき焼きで何気に一番肉を取ってたのも実はリインだったりする。

ああ、プレシアの時の『4人』の守護騎士はリイン、シグナム、ヴィータ、シャマルのことで、ザフィーラは犬形態ではやてにもふもふされてたよ。

バグの消去は一番簡単だったな。

バグ、というか闇の書の闇はそれも含めて闇の書だから、願いは『闇の書の正常化』で対価は『闇の書の闇の魔力』とかもできちゃって全部書の中でどうにかなっちゃいました。

だから外から見ると、書が光ったと思ったらリインフォースが登場っ！　みたいな感じてした。

「そ、それでは私の望みは、闇の書の完全封印は……………」

「うん、全くどうでもいい計画になっちゃったよ。残念でした」

はっはっは、ざまあ。あんたの計画なんて全部パーだぜ。

と思っていると

「ありがとう、本当にありがとう」

と涙を流しながら感謝されました。

なぜに？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3900v/>

魔法とかなんとか

2011年11月16日06時59分発行